

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：32619

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11965

研究課題名(和文)近代イギリスにおけるデザインのための色彩規格とナショナリズムの研究

研究課題名(英文)A Study of Nationalism and Modern British Colour Standards for Design

研究代表者

菅谷 杏子(日高杏子)(Hidaka, Kyoko)

芝浦工業大学・デザイン工学部・准教授

研究者番号：50801297

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文):本研究はデザイン学と色彩学の視座から、イギリスのデザイン規格カラーチャートへ投影された政治思想の一次資料に基づく論証を主眼に置いてきた。3年間にわたる伝統色の表象についての調査と発表を通じ、「国家」と「民族」を表現するプロパガンダ媒体としての色彩の検証を深めた。ブリティッシュカラーカウンシル発行カラーチャートの利用は、その表象のための道具であった。本研究成果の総括として、2021年9月に学術選書『色を分ける 色で分ける』(京都大学学術出版会)を上梓する予定である。ナチズムが「アーリア民族の純潔」を守るという思想の下、今まで注目されなかった他人種に対する身体色計測用カラーチャート各種を精査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、1930年代イギリスやヨーロッパ諸国の軍事パレード、観艦式、王侯の戴冠式や結婚式における路上や宮殿などを彩る国旗や装飾の色彩が、ナショナリズムの率直な視覚化と愛国心を煽るために用いられた点の検討である。ブリティッシュカラーカウンシルは、イギリスの国家的・軍事的式典の色彩計画とデザインを担当し、式典に特化したカラーチャートを発行した。本研究の社会的意義は、20世紀前半に伝統色が「国家」と「民族」を表現する媒体として利用されたことを掘り起こし、今後のデザインや社会趨勢の理解に活かすことである。ナショナリズムと色彩の関係の歴史は、現代を考える上で貴重な引き出しであったといえる。

研究成果の概要(英文):This research was conducted from the viewpoints of design studies and color studies, to prove the political ideology projected on the color charts of British design standards based on primary sources. 3 years of research on the representation of traditional colors have enabled me to deepen the examination of color as a propaganda medium to display "nation" and "race".

As a final summary of the results of this research, I will be publishing an academic book entitled "Color Categorization" (Kyoto University Press) in September 2021. In this book, I examine various color charts that were used to measure the eye and hair color of people, which have received little attention until now, under the ideology of Nazism and Fascism to protect the "purity and strength" of the Aryan race,

研究分野：色彩論

キーワード：色彩論 システム カラーチャート デザイン規格 標準化 ナショナリズム ブリティッシュカラーカウンシル 伝統色 ファ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

文明の始まりから、人間が自分をとりまく世界を表現するために「色彩」は欠かせない。この「色彩」を理論化し、より美しい配色を造形物に反映させる試みは、古代ギリシャの哲学者たちの時代からなされてきた。特に、いわゆる「色彩論」と呼ばれる研究領域では、17世紀以降のニュートンやゲーテを代表とする色彩学文献の詳細な分析が蓄積されてきた一方、20世紀以降の色彩論の規格化や監督する標準化団体については、さほど日本で言及されなかった。

イギリスの色彩の標準化や流行色に関する先行研究として、ホイットフィールド達の BSI (英国規格協会) の建築カラーチャートが世界標準規格へ与えた影響についての論文 (Whitfield, O'Connor 1986)、パティの色彩規格とカラーチャートの普及に関する論文 (Baty, 2013) や随筆、ブラスズィックのアメリカの工業化と流行色における規格の役割に関する著書がある。 (Blaszczyk, 2012)

ゲーテ著『色彩論』に端緒を發し、19世紀から20世紀にかけて多くの色彩論の著作が発表されてきた。そして20世紀には、これらを標準化する試みが各種団体によって行われた。本研究では、デザインと色彩の標準化の相関を補足するために、色彩学・デザイン学の視座から、20世紀前半イギリスにおけるデザインのための色彩規格とカラーチャートに見られるナショナリズムの影響を明らかにする。20世紀前半、ドイツのバウハウスで教鞭をとっていたイッテンやアルバースを代表に、各種の造形 (アート、建築、デザイン) のための色彩論が発展していた。同じ時代には、ナチスドイツを始めとする極端なナショナリズムがヨーロッパ諸国を席卷していた。

本研究では、とりわけブリティッシュカラーカウンシル (BCC) が発行した色彩規格の形式や製作背景を事例とした。ブリティッシュカラーカウンシルは、1931年に「イギリスの伝統色を標準化すること」を目的に設立され、1930年代から1950年代にかけて活動していた標準化団体であった。政府、産業、学術、園芸で使用するためのカラーチャートやインデックス (記号) を制作していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀ヨーロッパとアメリカの色彩の規格化の展開、および付随するカラーチャートに投影された政治思想背景を一次資料に基づいて論証し、新たなデザイン学の視点を打ち出す点にある。近代イギリスにおける各種デザイン向けのカラーチャートが、どこの国の規格に影響を受けているかを分析し、21世紀の色彩学・デザイン学の発展に資することを最終目標としている。本研究の特筆すべき社会的意義は、「伝統色をデザインで表現」と「ナショナリズム」との因果関係を解明し、国家的イベント (例: 万博、即位式、国体など) の空間デザインに応用することを目指している点である。

本研究着想のきっかけは、イギリスのカラーチャートが、アメリカ式のマンセルやドイツ式オストワルトの色彩表記法とは異なる独特な方法を指摘した論文を執筆したことからであった。ブリティッシュカラーカウンシルの発行した色彩規格とカラーチャートは、他国の色彩の表記をそのまま取り入れず、互換性に乏しい独自路線が見られることを論文で発表した。また、ミッドセンチュリーモダンという1950~1960年代の独特な配色のトレンドにも、ブリティッシュカラーカウンシルがイギリス政策面から関与していた。この政策について2017年に紀要論文で発表したことも、国家的な政策が与えるカラーチャートへの影響を分析する動機となった。

色彩規格とカラーチャートは、デザイナーが色を指定したり、工業製品として大量生産したりする上で、必要なコミュニケーション道具である。アメリカの美術教育家であったマンセルが色彩のコミュニケーションのために三属性 (色相・明度・彩度) を広く普及させた。このマンセルの三属性以外にも、ドイツやイギリスでも各種色彩の標準化への試みが20世紀前半に盛んになっていたのである。本研究は、20世紀の色彩の標準化や表色系を整理していくことにも貢献している。

3. 研究の方法

本研究の方法は、2種類ある。ひとつは一次文献調査で、もうひとつはカラーチャートの測色イギリスの色彩・デザインの規格成立と他国 - 特にアメリカ・ドイツ・イギリスの規格との覇権争いを軸に文献調査、およびカラーチャートの検討を進めた。また、各国の政治思想や、カラーチャート・表色系のしくみ、色彩語や用語の違いも丹念に比較してきた。これらのカラーチャートや付随文献の分析と批判を研究方法としている。カラーチャートのみならず、当時の写真、目撃者の記した文書、多様な種類の一次史料を用いる。

1970年前後には、ブリティッシュカラーカウンシルは活動停止したが、活動停止の背景には、イギリス工業の衰退と不景気が反映していた。イギリスの色彩・デザイン規格は、イギリスの

ナショナリズム、政策、および工業の浮沈の証左に他ならない。

これらブリティッシュカラーカウンシルの一次資料から、どの色相や明度・彩度への偏りがあるかを検討した。同時に、上記の出版物が発行された1930年代の社会背景の観察として、ブリティッシュカラーカウンシルのカラーチャートが取り入れた3属性や色名の検討を通じ、ヨーロッパとアメリカにおける1930年代のナショナリズム、その後は1950-60年代の人権・反人種差別運動の余波が読みとれた。

4. 研究成果

(1) 初年度2018年には、色彩の規格と標準化の状況を調査するため、マンセル表色系とブリティッシュカラーカウンシルの発行した基本的文献のレビューを行い、3属性を広めたアルバート・マンセルの没後100周年を記念するマンセルセンテニアルカラーシンポジウム(マサチューセッツ芸術大学開催)でポスター発表を行なった。

3属性は、物体色の色あい(色相)、明るさ(明度)、鮮やかさ(彩度)を記号・数値化して定量的に表記する基準である。伝達手段として色彩技術や科学において最も一般的に使用されている。現代のコンピュータグラフィックスの色指定は、この3属性から発展してきた。

(2)2年目の2019年には、イギリス国王ジョージ六世の戴冠式に使われた色彩計画を分析した。国家的式典とナショナリズムの表象としての伝統色との関係を明確にするためである。当時の写真、肖像画、風俗画や関連文献が一次資料である。特に、当時ヨーロッパ諸国で広まっていたナショナリズムの検討として、戴冠式の一環として行われた観艦式、園遊会、舞踏会も考察する。戴冠式で、色彩計画がどのように表現されていたのかを解き明かす。「イギリス伝統色」(1937)では染織見本が並び、戴冠式の色彩計画が示された。この見本に基づき、国旗ユニオンジャックの赤色、白色、青色を強調した配色、さらに国威を表すための金色と銀色、そして北部ブリテン島スコットランド民族の象徴であるタータンという色彩計画が忠実に表象された。当時の駐英大使の妻、吉田雪子によるエッセイには、これらの表象を目撃した当事者として、戴冠式衣裳の色彩についての描写がある。

(3) 最終年度の2020年は、イギリスやイタリアへの現地への渡航がコロナ禍によって困難であったため、20世紀前半、主に戦間期の文献をインターネットや書籍で参照した。「情報の科学と技術 71(3)」において『表色系とは何か』という招待論文を発表した。表色系とは、色彩を体系的に整理するためのあらゆる試みに対する用語である。色彩を客観的、なおかつ定量的に表現し、伝えるために表色系が生まれた。情報学用語に言い換えると、色彩に秩序を与え、エンコード(記号化)したのが表色系である。

従来の調査で漏れのあった先鋭なナショナリズム党派として、ファシズムについての調査を進めた。1920~1930年代にヨーロッパ各国に強い影響を及ぼしたナショナリズム、特にファシズムを体現するデザインと配色について、イギリスとイタリア、ドイツの違いを調査した。1930年代には、ヨーロッパ全体にファシズム的思想が拡がり、イギリスにおけるイギリスファシスト連合(the British Union of Fascists)も形成され、イギリスにおける「黒シャツ隊」へ波及した点を調査した。

(4) 本研究成果の総括として、何よりもまず2021年10月に『色を分ける色で分ける』(学術選書099 京都大学学術出版会)を上梓の予定である。(現在、校正中)この書籍は、色彩の分類や表色系の発達についての書籍である。本研究成果を、本書を通じて、社会に向けて幅広く発信が可能となる。本書では、本研究の内容を反映した全体主義国家の政治体制がもたらした「肌の色による分離」政策について、詳細な背景を記した。ナチズムとファシズムが「民族の純潔」を守るという思想の下で、今までほとんど注目されなかった有色人種や外国人に対しての身体色計測に使ったカラーチャート各種を精査した。

過去3年間の研究成果を踏まえ、2021年6月、日本色彩学会第52回全国大会'21(オンライン開催)において、イタリアのムッソリーニの国家ファシスト党やイギリスのモズレーが率いたイギリスファシスト連合の民兵組織「黒シャツ隊」(伊: Camicie Nere, 英: Blackshirts)を事例に、黒色が与える印象と社会背景との照合を行う。資料調査として、イギリスファシスト連合の機関週刊紙「The Blackshirt, 1933-1939」を中心に調査を行った。ファシズムはデザイン性を重視し、特にロゴやファッションをプロパガンダとして用いることが特徴である。黒色が包含する2重の意味 - 厳粛さと邪悪さが、これら黒シャツ隊を社会で目立たせることに貢献したことを、ハーヴェイは著書「Men in Black」(Harvey, 1995)で指摘した。

色彩学・デザイン学分野の発展のために、文書、特に一次文献による社会背景調査だけでなく、カラーチャートの測色分析により、ナショナリズムとデザインの流れを両面から深掘りする意義を打ち出すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 日高杏子、塚本惣一郎	4. 巻 43
2. 論文標題 ブリティッシュカラーカウンシル発行の園芸カラーチャートに関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本色彩学会誌	6. 最初と最後の頁 133-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15048/jcsaj.43.3_133	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 日高杏子	4. 巻 43
2. 論文標題 ブリティッシュカラーカウンシルとジョージ6世の戴冠式	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本色彩学会誌	6. 最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15048/jcsaj.43.3_41	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 日高杏子	4. 巻 32
2. 論文標題 イギリスの工場と事務所の色彩計画におけるミッドセンチュリーモダン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 多摩美術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 日高杏子	4. 巻 71
2. 論文標題 表色系とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 情報の科学と技術	6. 最初と最後の頁 101-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18919/jkg.71.3_101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 日高 杏子
2. 発表標題 イッテンとアルバースのバウハウス色彩論の比較
3. 学会等名 The 5th Asia Color Association Conference(ACA2019 Nagoya) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日高杏子
2. 発表標題 ブリティッシュカラーカウンシル公認のイギリス伝統色
3. 学会等名 日本色彩学会 第49回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kyoko Hidaka
2. 発表標題 Chemical Colorants' and Synthetic Fibers' Influence on the revisions of Munsell's "A Color Notation"
3. 学会等名 Munsell Centennial Color Symposium: Bridging Science, Art, & Industry (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高杏子
2. 発表標題 テキスタイルデザインにおけるオブ・アート アニ・アルバースとノルテキスタイルズ
3. 学会等名 芸術工学会 2018年度秋期大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高杏子
2. 発表標題 プリティッシュカラーカウンシルの安全色と識別表示の色彩
3. 学会等名 日本色彩学会 第51回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日高杏子
2. 発表標題 プリティッシュカラーカウンシルとジョージ6世の戴冠式
3. 学会等名 日本色彩学会 第50回全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日高杏子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益社団法人 色彩検定協会	5. 総ページ数 145
3. 書名 色彩検定 公式テキスト 1級編 色の表示（オストワルト表色系、NCS、色名）	

1. 著者名 日高杏子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益社団法人 色彩検定協会	5. 総ページ数 145
3. 書名 色彩検定 公式テキスト 2級編 色の表示（表色系）	

1. 著者名 日高杏子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 色を分ける 色で分ける	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/read0059560/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------